

書 齋 と 図 書 館

柳 父 琢 治

大学紛争で声高く言われたことの一つは大学解体という言葉であった。この言葉にさそわれて一つの疑問というか空想を持つようになった。もしある日突然にわれわれ日本人が何千人か何万人か何も過去の文明の遺産を持たずにどこかの無人島に漂着したとしたらどういう生活が始まるだろうか、という問である。第一は食料の確保であろう。次は着るものである。大学は何時頃必要を感じられるか、等と空想するのは楽しいようでもあるがいろいろ問題も出てくる。何県出身者だとか、何大学出身者だとかが集って、身内と他所者とをきびしく区別する社会が出来るのではあるまいかと、自分の家族の暮らしを守ることに精根を尽くしたあげく曲がりくねった野良道が残るのではあるまいかといろいろ空想する。抽象的に言うとなれわれが本来持っている固有の生活パターンはどんなものか、という問題である。その問題のなかに、日本の社会での公共性の考え方と、西欧市民社会での公共性とはどうも違うのではないか、という疑問がある。

マルクスが大英博物館に通って資本論を仕上げたというのは有名な話であるが、日本で伝記作家とか歴史小説家とか考証作家とかいわれている人で、図書館だけを頼りにする人は恐らくいないであろう。皆自分で集めた蔵書の中に埋もれて仕事をしておられるようである。大学の先生で、給料を全部はたいて参考書を買ひ込み、家がほんとに傾いたというのが学者らしい学者とされた。今でも、アメリカ物理学会に加入しているアメリカ人以外の会員の数を比較すると、フランス、イギリス、ドイツを抜いて圧倒的に日本人が多い。私の勝手な解釈であるが日本では公（おおやけ）は常にお上（かみ）であり、私事は何時もお上の許す範囲でしか行ない得なかったのではないか。自分の好きなように書物を利用するためには私有する以外に道がない、ということを示している。私事を守るために公共の施設を作るという発想はめつたに出て来ない。市民が金を出し合って夜警を傭うという発想と、お上が警官を配置して監視するというパターンとの相違がこういう学問の世界にもある。西欧市民社会で公共というのは私事の一部ではないか。自分のうちにある公共性ではないか。庭を塀の中にしまいこんで自分だけが楽しむとか、秘蔵の品は倉にしまいこんでめつた人には見せないとかいう習慣も考えて見れば公が常にお上であり、公共は常に私生活をおびやかすものであった時代に庶民が自分の生活を守るための知恵ではなかったという気がする。

今の日本の大学の制度とか、講義、演習、学生実験、野外実習、クラブ活動、さらに大学図書館とかいった形態はすべて舶来品であちら製である。所が生れは西欧でも日本に入ると日本的パターンに変質してしまう。講座制が家族制に取って替られ、研究室の図書は教授の私有物視された。それがいけないとなって図書を一箇所に集めた所では、文献マニヤの傾向のある人が長期間多数の図書を借出してしまつて他の人が利用出来ないという現象が生じている。独占の主が教授でなくなっただけで、多数の図書を独占したいという考えは消えていないのである。

図書館とか博物館とか美術館とか劇場とかいった公共文化施設を考え出したのは西欧の公共観であろう。自分のための書齋である公共図書館と、単に書庫の名前が変っただけの図書館とは利用のし易さに大きな差がある。その源は公共性と私事との関係をどうとらえるかの違いではないか。これが私の現在の疑問である。（化研・附属原子核科学研究施設長）